
イケメン君の憂鬱

orz

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イケメン君の憂鬱

【Nコード】

N60550

【作者名】

orz

【あらすじ】

“ 暁 雷鳴 ” いわゆるイケメン君はある日あまりに愛されて殺されてしまった

そして彼が目覚めたのは真っ白な異空間さてイケメン君はどうなってしまうのか

基本チート勇者的な話にしようとおもいます こんなks作者ですが生温かい目で見守ってください

第1話イケメン君死す！？

そこはアパートの一室――

ジリリリリ ジリリリリ

耳障りな音が鼓膜にひびく

少年は重い瞼をあげ上体を起こした

少年は無理やりおこされたのに腹をたてたのか目覚まし時計にむかつて

「うつせーんだよ バーカ」といった

が当然、時計が返事をするわけもなく

耳障りな音をだすばかり

少年のイライラは頂点にたつし

「この時計が――」時計を壁に叩きつけ始めた

正気に戻った時にはもう遅く時計は本来の姿を失いつつあった

それにきずいた少年は「くそっ これで今月壊れた時計13個突破したじゃんかよ」

逆ギレ気味に言った少年はふてくされた態度で制服に着替え始めり
ピングのテーブルの上にあったコンビ二弁当を口にかきこみ

学校へと向かった

この少年の名前は「暁 雷鳴」

この名前は親が雷のように強く勇ましくという意味を込めてつけた
ようだがその親は3年前に自殺したまゝこの話はまたの機会に話そう
そして肝心の“彼”は親が自殺してからなにに対しても無気力

特技なし趣味なし 人に自慢できることは綺麗に通ったはなすじ大
きい二重の整った目 金髪に染めたセミロングの髪にバランスのい
い長身

そういわゆるイケメン しかも毎日ラブレター10通以上もらって
いるとゆうまさに真正正銘のモテ男なのである
ちなみに現在高2である

- - 25分後 - -

学校へくる途中おかしな目線を感じたが考えないでおこう

校門の前に立った雷鳴はそんな事を考えながら学校にむかい歩き始めるとまず女子達の溢れんばかりの歓声をあびながら校舎にはいり下駄箱を開けるとラブレターが2?3枚入っていたがもう面倒くさかったなので隣の下駄箱にいれといた

次に教室にむかい歩き出し教室にはいるとクラスの女子が一気に雷鳴によってきた

雷鳴は女子のたわいもない会話にいやいや耳をかたむけながら席に座り机の中を探ると7枚ラブレターがはいっていた

そして数分後学校のチャイムが鳴ると女子が名残惜しそうに散っていった

それから担任が登場し朝のHRが始まり1?2?3?4?5?6時間目が終わり帰りのHRでさようならの合図が終わり帰り際違う学校1可愛いと評判の愛美に告られたがもちろんふった

帰り道目覚まし時計を買いにドンキにより明日の朝食にとサンドイッチを買っていった

- - 家への帰り道 - -

「はぁ今日もだるかった」と呟いてみた

するとうしろから「私の事なんでふったの?」雷鳴は予期してなかった返事に驚き「はひえ」とゆうマヌケな声がでてしまったがひとまず振り返った

すると後ろに明らかにいつちゃた目をした愛美が包丁を持って立っていた

「えっなんで包丁なんかもってんの」
すると愛美は

「こうするしか一緒になる方法はないんだお」いつもの愛美と違うしゃべり方

やっぱいつちゃてる

「まさかのヤンデレっすかww」

「これで一緒になれるんだお 永遠にね」

「ちよっおま」

「ずっとずうーと一緒」

月明かりに照らされた包丁をふりかぶった彼女は最高に怖かった
ブスッ

包丁が肉をさき俺のぞーもつを貫いた

「うう まじかよ」

はぁ俺死ぬのか でもまあこの世に悔いなんてないし こんな世界
生きてたってメンドイしそうおもいつつ遠のいていく意識でも妙に
冴えてる頭

目を閉じると心地いいあぁなんか眠い

そして俺は眠りについた

そう決して醒めることのない眠りに

第1話イケメン君死す！？（後書き）

はいサーセン

文章が全体的にかたいっすね

感想とかあつたらください

第2話イケメン君異世界に行く

目が覚めるとそこは真っ白な空間だった
そして体の軽さ　なんだか心地いい浮遊感
本当に浮いてるみたいだ??????

???いや本当に浮いてるんだなんでだ

俺はまわりをみたがなにもないある物といったら地平線ぐらいか
しかし不思議な所だ太陽がないのにもかかわらず眩しいくらいに光
が溢れてる

「どうだ気持ちいい場所だろ」

ああ気持ちいい場所ってお前誰だよ

「なんだと人間程度の種族が僕に向かってでも格好いいから許す
(はあと)」

「はいキモイ　マジ2回死ね　てかお前誰だよ?」

「ああ僕?　僕は神」

「へえww　そうなんだ凄いなww　マジそんけーするわwwww
」

「なに語尾に“ww”つけてんの　絶対信じてないやん　泣くぞ
そんな扱いされちゃうと僕泣くぞ」

「てかつ　どこいんの　ちよつと1発殴ってやりたいんだけど」

「殴られるのはやだけどテレパシーもメンドイからそっちにいった
る」

少しの間をおいて前方の空間が突然光り始めた

光るといっても豆電球のような光りではなく太陽のような輝きだ
俺はあまりに突然の出来事で目を守る事が出来ずちよくに浴びてし
まった

「うう　目が」クリリンの太陽拳浴びたらこんな感じなのかなあと
考えていると

「あれー目が眩んじやいまちいたかww
まったくー」

「畜生」

眩んだ目を強引に開けるが殆どなにも見えない
少しずつ目が慣れてきたが
そのとき

「これでも食らえ オラ」

“神”は俺にすね蹴りをくらわしてきた
「ああ！！ い、痛っううう」

痛みに悶える俺 それを見て神は大爆笑
「神を馬鹿にした罰じゃww」

痛みがやつと和らいできた

「おいテメエ???なに???すんだよ」

俺の目に飛びこんできたのは長髪の幼女
小学生にしか見えない
すると神は

「幼女かそれもいいがそれ以上に大事な話があつてここに召喚した」

「はあ でその用とは??」

「君に世界を「拒否」はいいいいいい」

「なんかだるそーだし 俺みたいな一般人に救える訳ない「いやそれがあるんだなー」」

「へえwww「信じなよ僕、神だよ 基本全知全能ですからねー
じゃあこの茶番もあきたんで異世界にとばしまー」す」

「はあ? ちょっとまゝ「特殊能力はつけといてやるからいつてら
ー」」

雷鳴は光に包まれ 跡形もなくけされた

「君に僕同様の力は与えた あとは君がその力をどうつかうかだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6055o/>

イケメン君の憂鬱

2010年10月31日03時38分発行